



素粒子運動と物理存在の構築への考察

令和6年10月27日

黒田 毅

自然界を考察するとき、半永久運動が存在し、エネルギーの拡大において現実が与えられるものでない。それは固定数におけるエネルギー量の変化が、半永久運動と共に、すべての現実の変化を形成していると考えられるのである。

これらすべての現実はエネルギー保存の法則において、その均等化を働きとすることは正しいと考える。

またすべての素粒子や原子運動の形成は、半永久性を有し、すべての自然界現実において、その運動性を永続するものである。これらすべての運動性の永続は、変化とともに、そのバランスの形成を与え、現実を維持する。

バランスへの回帰という中心点は、すべての物理運動における共有性である。これらはすべての物理現実が自己を回帰する中心点の存在を提案するものである。

これらはビックバンが、その中心からの拡大であり、ゼロという定義を提案するならば、それら中心点からの拡大が中心点における限界性を与え、エネルギー量の形成が、固定数を与えると定義するものである。

また中心点への回帰運動と、その力形成における限界点の構築は、引力場の形成と張力の限界点の形成において、すべての物理的現実の許容性と現実を行うと定義できるのである。

これらは空間の形成への考察も可能とするものである。

またすべての物理現実がエネルギー運動であるならば、質量の形成などや力の形成とともに、すべては、運動性における物理現実の構築であると定義できるものである。

これらは視覚と触覚における現実の認識は身体作用性における現実判断であり、存在性への理解という物理学の論点における考察は、完全に相違するものであると定義できるのである。



これら存在する力の形成は、運動における引力の形成が質量において与えられるという仮説は可能なのである。また極性における存在は、極性における現実を与える。これらがバランスを形成し世界が存在するのは真実である。

また質量それ自体が、運動における存在であると仮定することも可能なのである。 $m=E/c^2$ という定式において、それを定義することができるのである。これらは質量が、エネルギーと光において存在すると仮説できるのである。

また $c=\sqrt{E/m}$ において定義される光速は、エネルギーの存在とその反発性における速度形成などを提起であるのである。またエネルギーの存在原理や、質量の形成とエネルギーの相関性などへの疑問の提起ができる。

またビッグバンがエネルギーの拡大と空間の形成であるならば、 $E=mc^2$ という定式は、光という存在性におけるエネルギーそれ自体の存在を定義するものであり、エネルギーの凝縮性というビッグバン直後の宇宙において、その凝縮性は、光の形成を与えると考えることができると考えられる。

これらは始原の存在性への考察を、エネルギー量の固定数において模索でき、空間の形成という宇宙の拡大へ、その数式と数字の提示において、その存在の根本性の解明を提案できるのである。